

A Study of Painting and Dance Subjects for
Children with Intellectual Disabilities III :
Collaboration Possibility of Art and Dance Classes
at Special School

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 智子, 山崎, 朱音 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028509

知的障害のある児童生徒を対象とした造形及びダンスの題材研究Ⅲ

：特別支援学校における造形とダンスの授業づくりの可能性

A Study of Painting and Dance Subjects for Children with Intellectual Disabilities III
: Collaboration Possibility of Art and Dance Classes at Special School

高橋 智子¹, 山崎 朱音²

Tomoko TAKAHASHI, Akane YAMAZAKI

(令和3年11月30日受理)

要旨

本研究では、知的障害のある児童生徒を対象として、図画工作科及び美術科と体育科及び保健体育科の表現領域（造形及びダンス）に着目し、教科間の連携による題材開発及び研究等の可能性を探ることを目的としている。造形及びダンスを組み合わせた題材の実施にあたり、現場教員が感じている授業づくりの課題等の実態把握の必要性があると考え、特別支援学校（知的障害）に勤務する現場教員（1名）¹を対象として、質問紙調査と質問紙調査をもとにインタビュー調査を実施した。調査内容は、①鑑賞や造形及びダンスの実践の現状と課題、②鑑賞や造形及びダンスの指導の現状や指導上の課題や可能性、③造形及びダンスの教育的意義、④造形及びダンスの連携の課題や改善点、⑤造形及びダンスを組み合わせた授業実施に必要な教員の資質・能力についての5点となっている。前報²では、①と②について報告と考察を行った。本稿では、③④⑤について報告と考察を行う。

1. はじめに

近年、障害者による文化芸術活動が着目されている。平成29年に告示された特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の中では、生涯を通して主体的に学んだり、スポーツや文化に親しんだりして、自らの人生をよりよくしていく態度を育成すること等が規定された。今後は、学校教育段階において、各教科等を通して、児童生徒が生涯学習への意欲を高め、積極的に文化芸術活動に親しみ、豊かな生活を営むことができるよう創意工夫を行っていく必要がある。

知的障害のある生徒の学習上の特性として、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすいことや実際の生活の場面の中で生かすことが難しいことが挙げられており³、高等部では将来の生活を見据えた学習を生活の流れに即して学ぶことが効果的であるとされ、各教科等を合

¹ 美術教育系列

² 横浜国立大学 教育学部 保健体育

わせた指導が積極的に行われている⁴。美術科と家庭科の伝統文化に関する教科横断的な授業研究では、生徒の学びに対する教科横断的な授業の有効性が示唆されている⁵⁶⁷。今後、図画工作科及び美術科と体育科及び保健体育科の表現領域（造形及びダンス）における児童生徒の学びを深めるためにも、各教科のつながりを意識した題材開発やカリキュラムの在り方について検討することが期待される。なお、各教科の関連性を図りながら系統性や発展的な指導を行っていくためには、教員が各教科の教育内容を相互の関係で捉え、題材開発や研究を深めていく力が求められる。

本研究では、知的障害のある児童生徒を対象として、図画工作科及び美術科と体育科及び保健体育科の表現領域（造形及びダンス）に着目し、教科間の連携による題材開発及び研究等の可能性を探ることを目的としている⁸。これまで、障害者の文化芸術活動や学校教育における現状を分析し、自身らが実施した造形とダンスのワークショップをもとに、その成果と課題を検討した⁹。さらに、前報²では、先のワークショップを参観した特別支援学校（知的障害）に勤務する現場教員（1名）を対象として、質問紙調査とインタビュー調査を実施した。教科間の連携による題材開発及び研究に向け、まずは、現場教員が感じている授業づくりの課題等の実態把握の必要性があると考えたからである。

調査内容は、①鑑賞や造形及びダンスの実践の現状と課題、②鑑賞や造形及びダンスの指導の現状や指導上の課題や可能性、③造形及びダンスの教育的意義、④造形及びダンスの連携の課題や改善点、⑤造形及びダンスを組み合わせた授業実施に必要な教員の資質・能力についての5点となっている。

2. 鑑賞や造形及びダンスの実践及び指導の現状と課題等について

前報²では、鑑賞や造形及びダンスの実践・指導の現状と課題やその可能性（①②）について、筆者らが実施したワークショップを参観した特別支援学校（小学部：知的障害）現職教員1名を対象として、質問紙調査とインタビュー調査を実施し、その考察を行った。

その結果、図画工作科の鑑賞と表現は相互に関連させながら実施されている傾向が強く、体育科の表現運動領域（ダンス）ではそうした鑑賞と表現の関連性はほとんど見られない傾向にあることが明らかになった。図画工作科においては、鑑賞と表現を相互に関連させながら、児童の資質・能力を育む傾向にあり、その学習の効果も認識されていた。

両教科ともに、造形とダンスの活動において、児童の実態把握の重要性が理解されており、図画工作科では児童の実態（興味関心や知識・技能等）をもとに、段階的に目標や題材が設定され、指導の工夫が行われていることも分析できた。造形やダンスの活動において、児童の実態把握は欠かせないものであることを現場教員も認識しているといえる。また、両教科ともに児童の豊かな創造のためには、想像とそれを実現する手段（知識・技能）のバランスが重要だと捉えられている傾向にあった。一方で、体育科（ダンス）においては、児童の実態に合わせた目標設定や内容設定、指導・支援の在り方が課題として挙げられていた。以上のように、教科により実践の現状や課題について共通点や相違点が生じていることが明らかになった。

前述した各教科の現状を確認した上で、本稿では両教科の連携に関する教育的意義（③）や課題及び改善点（④）、連携による授業実施に必要な教員の資質・能力（⑤）について、前報²の現場教員への質問紙調査及びインタビュー調査をもとに考察を行う。この考察を通して、特

別支援学校（知的障害）における造形及びダンスの題材開発及び研究等の可能性を探り、両教科が連携した題材開発及び研究の一助とする。

3. 特別支援学校（知的障害）における造形とダンスの連携による授業づくりの現状と課題

(1) インタビュー内容

インタビューは、質問紙（質問内容は、以下の a～j の 10 項目）¹⁰を事前にメールで当該教員に送付し、その内容について、直接聞き取りを行う方法（半構造化インタビュー）で実施した。聞き取りの際には、音声録音を行った。本調査分析には、本質問用紙への回答と音声録音を文字起こししたデータを使用した。本稿の分析に関連する質問項目には、下線を記した。

- a. 知的障害のある子に対する鑑賞活動の現状について
- b. 知的障害のある子に対するダンスの現状（実施状況及び課題等）について
- c. 知的障害のある子に対する造形の現状（実施状況及び課題等）について
- d. 知的障害のある子に対する連携（鑑賞、ダンス、造形）による活動の現状について
- e. 知的障害のある子にとっての鑑賞、ダンス、造形、それぞれの教育的意義及び連携による活動（表現と鑑賞の一体化）に関する教育的意義について（実施前、実施後）
- f. 鑑賞活動の指導上の課題や可能性について
- g. ダンス活動の指導上の課題や可能性について
- h. 造形活動の指導上の課題や可能性について
- i. 連携プログラムを学校教育において実施する際の改善点や可能性について
- j. 「i」の改善点や可能性を実現するために必要な取り組み方について（現場教員の授業づくりにおける悩み等）

(2) 対象者及び調査場所と時期

調査対象は、ワークショップに観察者として参加していた特別支援学校（小学部：知的障害）の教員 1 名（特別支援学校における教職経験年数：12 年）とした。調査は当該教員の赴任校で実施し、調査時期は 2019 年 4 月 19 日（金）であった。インタビュー時間は、90 分であった。

(3) 分析方法

インタビューの分析方法として、事前に作成したフォーマットに文字起こししたデータを分類し、その実態や傾向等を分析する方法を用いた。文字起こししたデータは、同一の内容をひとつのまとまりとし、フォーマットへの分類を行った。その際、当該教員へインタビュー前に配布した質問紙（インタビューと同様項目で構成）に、事前に記入されていた内容もフォーマットへ追記し、分類した。なお、表 1 は「質問項目 d」、表 2 は「質問項目 e」、表 3 は「質問項目 i」、表 4 は「質問項目 j」に対応する。

本分析で用いたフォーマットは、前報²と同様のものを使用した。これは、先行研究¹¹において、授業者が自身の授業づくりに対する実態把握や考えの明確化、授業者の授業に対する考え方の変化や授業過程における気づき等をフィードバックするために作成したものである。本フ

フォーマットには、授業づくりの要素となる「授業実践」「教科連携」「子供理解」「教員自身の努力」が項目として挙げられている。さらに、「授業実践」については【目的】【内容】【方法】【過程】【評価】に細分化されている¹²。そのため、本インタビュー内容の分析に使用することで、現場教員が捉えている授業の視点等が明確になると考えた。なお、分類結果の内的妥当性を高めるため、2名の研究者（美術教育、舞踊教育）によるトライアングレーションを行った。

（4）インタビューの結果及び考察

1) 連携による活動の現状（質問項目 d）

鑑賞、造形、ダンスの連携による活動の現状について、インタビュー内容をフォーマットに分類した結果を表1に示す。なお、表内に示すインタビュー内容は、筆者らにより要約したものである。

表1 連携による活動の現状

	KW	語句説明	現状	課題	可能性
授業実践	目的	授業目的について			
	内容	テーマ等	造形と鑑賞は、相互の関連性を持たせることはある。学校行事の際には、皆でステージ背景を描いて、ステージでダンスを踊ることもある。		
	方法	教材教具の工夫、指導方法の工夫について			
	過程	カリキュラムや授業構想（計画）について	図画工作科と生活科や生活単元学習、音楽科と相互のつながりを意識するが、体育科とのつながりはあまり意識できていなかった。		体育という捉えではなく、身体表現(ダンス)という捉えだとつながりやすい。
	評価	授業前・中・後の評価について			
子供理解	子供理解について				
教科連携	教科連携について				
教員自身の努力	研修・教材研究等				
その他	上記以外		造形や鑑賞、体育（ダンス）の全てを関連付けた題材には取り組んでいなかった。		

インタビューの結果は、「授業実践」【内容】【過程】、「その他」に分類された。本研究の調査対象者が所属する特別支援学校（知的障害）において、鑑賞、造形、ダンスの全てが連携された授業は実施されていないことがわかった。一方、鑑賞と造形については相互の関連性を持たせた授業が実施されている。造形とダンスの連携実践として、学校行事の中でステージ背景を描き、その前でダンスを踊るという経験はあるが、双方の目的や内容の関連性を意識した連携とはいいいがたい実態があった。なお、前報²にてダンスをリトミックと混同して授業を実践していたこと¹³が明らかになっていたが、ダンスを「身体表現」と捉えなおすことにより、鑑賞や造形との連携の可能性を見出すことができることが考察された。連携による現状としては、「授業実践の【目的】【方法】【評価】、「子供理解」「教科連携」「教員自身の努力」が空欄であり、それらの視点から連携を捉えられていない現状も示された。

2) 連携による教育的意義（質問項目 e）

鑑賞、造形、ダンスの連携の教育的意義について、インタビュー内容をフォーマットに分類した結果を表2に示す。

インタビュー結果は、「授業実践」【内容】【過程】【評価】、「子供理解」に分類された。【内容】からは、鑑賞と表現（造形）の相互の関連を持たせるだけではなく、感じたことや思ったこと

表2 連携による教育的意義

	KW	語句説明	現状	課題	可能性
授業実践	目的	授業目的について			
	内容	テーマ等			表現のイメージを広げるには、鑑賞からどのようにイメージを広げていくのか、イメージしたものをどのように表現するのかという過程を机上でのみ取り組んでいた。鑑賞を通して、感じたことや思ったことを体を使って表現することで、机上のみでイメージするよりも自分の中でイメージが広がるのは感じた。イメージを深めたり、他のことにも興味を持てるようになったり等は、造形、鑑賞、ダンスを関連付けて実施することが影響していると感じた。難しさも伴うが。 表現する内容（テーマ）が「架空の生きもの」であっても、鑑賞することやなりきって踊ってみること、描くことの3つの活動の視点から捉えることができる。こうした視点や捉え方が豊かに広がる可能性がある。 各活動が独立しているのではなく、創造活動だからこそ、つながりを意識することができる。鑑賞を通して見つけた生きものになりきって踊り、そのイメージをもとに絵を描く流れがスムーズで違和感がなかった。
	方法	教材教具の工夫、指導方法の工夫について			
	過程	カリキュラムや授業構想（計画）について			表現の多様性。色々な表現の仕方が、一つの空間の中にある。バラバラに授業を行うとそれぞれの表現になるが、提示されたテーマに対して、「鑑賞しながらダンスで体を使って表現し、さらにそれを絵に表現すること」で、児童の表現に広がりが見られるところは、児童にとっても面白い。
	評価	授業前・中・後の評価について			鑑賞、ダンス、描く活動を単独で評価するのではなく、3つの活動を関連づけて価値づけていくことが可能になる。 1つの活動のみでは価値付けられないことも、3つの活動を関連付けることによって、児童の学びの姿を価値付けることが可能になる。発揮している資質能力を俯瞰して捉えることができる。造形活動のみだった場合、造形活動での児童の表れをもとに、本人の意思を捉えきれないまま、勝手な解釈で一方的にアドバイスしてしまうかもしれない。鑑賞やダンスも造形と関連付けていくと、児童の実態がより見えてくる。
	子供理解	子供理解について			ワークショップの中で、自分が知っている児童について、先入観で鑑賞は難しいだろう、ダンスも難しいだろうと思って見ていた。しかし、屏風をじっくり見ており、ダンスも人を真似ていたかもしれないが楽しそうに体をいっぱい動かしていた。（造形で）表現する時に何の迷いもなく、自分で描きたいものを選んで、楽しそうに描いていた。とても感心した。そうした児童の表れを通して、造形、鑑賞、ダンスを相互に関連付けていく意味があると感じた。教員側の理解では分かりづらくても、表現する姿から、本人なりに鑑賞活動に取り組んでいたのだろうと気づいた。
教科連携	教科連携について				
教員自身の努力	研修・教材研究等				
その他	上記以外				

を、身体を使ってダンスで表現することにより、児童の表現したいイメージがさらに広がると認識されていることがわかる。また、鑑賞、造形、ダンスは創造活動としての共通性があるため、相互の関連付けがしやすく、児童が3つの連動した活動を通して、イメージを広げたり、深めたり、興味を持ったりすることが可能になると捉えられている。同一テーマのもと、活動につながりを持たせることで、創造活動の面白さを児童が感じるきっかけになるという可能性も示唆された。単独の活動として評価するのではなく、一連の創造活動として評価することで、児童の表現の可能性をさらに引き出すことや価値づけること、3つの活動から児童の実態を幅広く捉えることの可能性も示された。参観したワークショップでは、普段とは違った創造（鑑賞、造形、ダンス）に向かう児童の姿が観察できており、その表れから、連携の効果を強く感じていることが考察された。

3) 連携プログラムを学校教育において実施する際の改善点と可能性（質問項目 i）

鑑賞、造形、ダンスの連携に向けた改善点や可能性について、インタビュー内容をフォーマットに分類した結果を表3に示す。なお、本質問項目では、インタビュー対象者の勤務校で同様の活動を実施する場合を想定しているため、活動の改善点と可能性が具体的に回答された。

表3 連携プログラムを学校教育において実施する際の改善点と可能性

	KW	語句説明	現状	課題	可能性
授業実践	目的	授業目的について			
	内容	テーマ等			鑑賞やダンス活動を通して、対象への意識をより深めることができる。楽しいなっているような表現の仕方をするから、いろんな表現が楽しくなる。
	方法	教材教具の工夫、指導方法の工夫について			道具の扱い方や活動方法等、指導者の提示の仕方などで個々に応じた工夫があると、できることが増える。個別のサポートも重要。児童の実態は小学部の中でも同じ学年でも様々だが、時間の集中は30分のため、低学年の活動時間は30分。 今回は話すことと合わせて、イラストで活動内容等を示して流れを計画的に提示していた。その他の工夫としては、画材が置いてあるところ。そこから選べる子ももちろんいるが、個別に配布し絞って置いておいても、そこから取ってみようという気持ちになったりする。低学年の児童は、どこまで自分で選択できるかわからない。それは本当に児童の実態によるので、小学部で実践する場合は、置き方についても伝え方についても改善していく必要がある。担任が支援方法は理解しているので、今回のワークショップをベースに方法を修正していく。
			活動集団の大きさも重要。1～6年生の集団では、実態差が大きすぎて、同時に活動をするにも難しさが伴う。		一対一の指導体制だったら、充実した指導支援が可能だが、一斉指導となると、難しい。そのため、クラス毎や低学年と中・高学年といった小集団がいい。内容も実態に合わせて弾力的になっていると取り組みやすい。
					活動の仕方はそれぞれだが、みんなで作ったものが集まって一つのものとなると児童はすごく喜ぶ。ダンスでも造形でもできること。
					慣れた場所で繰り返し回数を重ねて実行したい。これにより、活動場所が変わってもできるようにする。
	過程	カリキュラムや授業構想(計画)について			
	評価	授業前・中・後の評価について			
子供理解		子供理解について	長時間の活動になると集中力が難しい。今回はワークショップだからできた。		あのワークショップにいた児童は、わりとイメージできた子が多かったなと思う。 集団の実態に合わせて、時間や回数を計画すること。ストーリーのある活動、繰り返しの活動の中で取り組むことが有効。そのため本校では、実態に合わせた時間や回数があればいい。低学年は本当に30分程度の繰り返し。 低学年は30分の活動時間。高学年は45分の活動時間。
教科連携		教科連携について			
教員自身の努力		研修・教材研究等			
その他		上記以外			

インタビュー結果は、「授業実践」【内容】【方法】、「子供理解」に分類された。インタビュー対象者の学校での実施を仮定した質問であったが、表3の結果から、鑑賞、造形、ダンスの連携の可能性は、主に「授業実践」の検討を行うことで広がるものといえる。さらに、「授業実践」の中でも【方法】に関する改善点や可能性が多く示されているのが特徴的である。具体的には、集団の実態に合わせた学習内容や方法の精査、活動の回数や時間の検討、学習集団の設定、教室環境及び教材教具の検討等が挙げられた。また、共同活動及び継続的な活動の在り方の検討、個別と集団での支援体制の在り方等、本ワークショップの実践をもとに、児童の実態に合わせて修正していくことが必要であると捉えていることが考察された。

4) 連携に向けた改善点や可能性を実現するための必要な取り組みについて(質問項目j)

鑑賞、造形、ダンスの連携に必要な取り組みについて、インタビュー内容をフォーマットに分類した結果を表4に示す。表4は、表3で示された「連携に向けた改善点や可能性」を実現するための「必要な取り組み」についてまとめたものである。

表4 連携に向けた改善点や可能性を実現するための必要な取り組みについて

	KW	語句説明	現状	課題	可能性
授業実践	目的	授業目的について			造形、鑑賞、ダンスを関連付けた題材とそこに3つの活動の視点から目標が設定される。例えば鑑賞ではこういう付けたい力、ダンスではこういう付けたい力、図工ではこういう付けたい力とあり、それがいつもは独立している。しかし今回は関連性があるため、鑑賞活動がダンスにも生きてくるし、ダンスが造形につながり、それが関連付けられた。そうした目標の関連付けを検討する必要がある。単独教科だけの目標を系統表で示すのではなく、相互に関連した目標の系統表作成の難しさを感じる。
	内容	テーマ等			
	方法	教材教具の工夫、指導方法の工夫について			材料・用具の知識・技能を身に付けさせたいが、なかなかねらうことは難しいけれど、その必要性を感じた。
	過程	カリキュラムや授業構想(計画)について			ワークショップは、生涯学習センターで特別な場で、特別な時間。1回だけ手をあげた児童が、定員の限られた中で実施した。学校教育だと、そこにいる児童が系統的(カリキュラム)に学ぶことができるのが魅力。
	評価	授業前・中・後の評価について			
子供理解		子供理解について			連携させることは、学校としてもやっていきたい。地域と学校や大学がつながっていくと児童の居場所が広がっていく。
教科連携		教科連携について			本校の目標の中に、大学と連携し、いろんな専門的な体験をすることや、知識・技能を広げることがある。さらに美術館は余暇の場所にもなる。居場所を広げていく、地域とのつながりを持っていくということにも広めていきたい、つながりをつくっていきたい。それを教育の中で実践していきたい。
					連携の取り組みを行う上で、人とのつながり(人脈)をどのように構築していき、3つの活動を組み立てて行ったらいいのかなという難しさがあるし、そこに可能性を感じる。
					単独の教科じゃなくて、合わせた指導では、連携により児童の学びがどのように高まっていくのか、考えづらさがあるのが悩みどころ。図工のみではイメージしやすい。低学年から高学年への内容等のつながりについて。一方で、体育と図工、地域と連携した活動内容のつながりについては、難しい。モデルケース等があれば考えやすくなりそう。
教員自身の努力		研修・教材研究等			本校は行事がすごく多いため、行事の合間をぬってどうやって学習内容を組んでいくか。行事とか教育実習を考慮しながら、どう単元を組んでいくのが難しい。やらなければいけないことと、やりたいことがある。それでも挑戦していきたい。
					ペースがあり、考える視点とかが誰でもわかれば、教員の引き出し等の問題も解消される。
その他		上記以外			

インタビュー結果は、「授業実践」【目的】【方法】【過程】、「子供理解」、「教科連携」、「教員自身の努力」に分類された。表3と比較すると、「授業実践」、「子供理解」、「教科連携」、「教員自身の努力」の全ての項目が「必要な取り組み」として認識されていることがわかる。

「授業実践」や「教科連携」では、各活動の目標の明確化の必要性が挙げられた。目指す児童の姿を共有した上で、相互の内容を関連させた目標設定の必要性が示された。あわせて、3つの活動を関連させた系統表作成(カリキュラム)の課題が示されると共に、学校教育では目標や内容の系統性を明確にすることで段階的に学びを広げたり深めたりすることが可能になるといえるため、その検討の必要性も示された。知識・技能の習得及び活用や各教科の連携を想定したモデルケースの必要性も示された。さらに、「教科連携」では、児童の居場所づくりや専門的な体験、知識・技能の学びの広がりにおいて、地域と学校等のつながりの重要性が示された。連携における人のネットワークづくりの重要性も指摘されており、地域における豊かなネットワーク構築の難しさとその必要性が示された。

「教員自身の努力」では、学校行事等を考慮した学習内容の組み方について課題が挙げられているが、連携に対する期待や意欲も同時に示されている。3つの活動を関連させる視点やポイント等がわかりやすく提示されることで、各活動の専門性が低い場合でも連携による学習活動に取り組みやすくなることが期待されているといえる。

5) まとめ

前述してきた結果をもとに、現場教員の視点から、③造形及びダンスの教育的意義、④造形及びダンスの連携の課題や改善点、⑤造形及びダンスを組み合わせた授業実施に必要な教員の資質・能力についての考察を行う。

まず、「③造形及びダンスの教育的意義」について、現状では鑑賞、造形、ダンスを連携させた授業は実施されていないが、連携による学習活動では、様々な実態の児童が幅広い創造活動を通して、a. 興味を抱くことや面白さを感じることに、b. 創造の可能性を広げたり深めたりすることに、c. 児童の実態に合わせた表現の価値付けができること等の意義があると捉えられていることが示された。

次に、「④造形及びダンスの連携の課題や改善点」について、勤務校で同様の連携による実践を試みるにあたり、一番の課題は児童の実態に合わせた「授業実践」の【方法】に集中している結果となった。連携による学習内容や方法、計画、環境、形態、指導支援、教材教具等の幅広い検討が課題や改善点として挙げられた。これは、連携による創造活動を「何を」「どのくらい」「何をつかって」「どのように」実施するのかが、教員の中で不明確であることを指すものといえる。鑑賞、造形、ダンスの連携の可能性は、主に「授業実践」の検討を行うことで広がるといえる。

最後に、「⑤造形及びダンスを組み合わせた授業実施に必要な教員の資質・能力」を考察するため、先に挙げた表4の「必要な取り組み」について振り返る。「必要な取り組み」では、a. 各活動の目標の明確化、b. 相互の内容を関連させた目標設定、c. 相互の内容を関連させた系統表（カリキュラム）の検討、d. 地域・学校・人のネットワークづくり、e. 連携を想定したモデルケースの検討、f. 連携による学習活動の魅力（視点やポイント等）の整理や提示等の必要性が示された。これを言い換えると、教員にはこれらの資質・能力が求められると現場教員が捉えていることがわかる。上記のa～fには、各教科や連携による目標の明確化及びカリキュラムの構築に関する力、学習内容をより充実させるためのネットワークづくりに関する力、また相互に学び合えるモデルケースや学習活動の視点等を検討する力が挙げられた。

4. おわりに

本研究では、図画工作科及び美術科と体育科及び保健体育科の教科間の連携による題材開発及び研究等の可能性を探ることを目的とした。現場教員のインタビュー調査を通して、①鑑賞や造形及びダンスの実践の現状と課題、②鑑賞や造形及びダンスの指導の現状や指導上の課題や可能性、③造形及びダンスの教育的意義、④造形及びダンスの連携の課題や改善点、⑤造形及びダンスを組み合わせた授業実施に必要な教員の資質・能力について、考察を行った。

本稿は第3報目にあたり、主に③④⑤の考察を行った。考察からは、連携の現状や教育的意義、連携に必要な教員の資質・能力が示された。なお、本調査は、ワークショップに参観した教員1名を対象としているため、ひとつの指標として捉えることができるが、一事例に留まる。それ故に、さらなる教員への調査も継続して必要になると考える。こうした調査を同時に実施しながら、教科間の連携による授業実施を実現するにあたって必要な教員の資質・能力の考察もさらに深めていくことが求められる。特に図画工作科及び美術科の造形と体育科及び保健体育科のダンスの連携による授業実践では、教員の創造活動に対する理解や自身の表現経験も重要となる。上記で示した検討のみならず、教員が創造活動に対して苦手意識や偏見等を持つ

ではなく、自身が表現者として創造活動を捉えることも必要である。こうした捉えが、各活動の特性を系統的に捉え、活動の横のつながりと児童の発達段階を考慮した縦のつながりを検討しうるカリキュラムマネジメント力につながると考える。

今後の検討課題は、本研究で実施したワークショップや本稿と前報²での考察を踏まえ、学校での連携による授業実践に向け、各教科及び連携による目標整理やモデルケースの検討、指導内容・指導方法の一般化を試みていくことである。また、こうした学校教育での連携による授業実施が、将来の積極的な文化芸術活動への参加を促す基盤をつくるものになるよう努めていくことである。

註

- ¹ 調査対象者は、著者らが地域の生涯学習センターで実施した造形とダンスを組み合わせたワークショップ（2019年1月に実施：全1回）に観察者として参加した教員である。
- ² 山崎朱音・高橋智子「知的障害のある児童生徒を対象とした造形及びダンスの題材研究Ⅱ：特別支援学校における造形とダンスの授業づくりの現状と課題」静岡大学教育学部研究報告 人文・社会・自然科学篇、71、pp. 276-287、2020
- ³ 文部科学省「特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編（上）（高等部）」ジヤース教育新社、p. 29、2020
- ⁴ 同上、p. 33
- ⁵ 高橋智子・村上陽子「特別支援学校（知的）における伝統文化を題材にした教科横断的な授業実践：日本の美術作品（屏風）に着目して」教科開発学論集、9、PP. 73-87、2021
- ⁶ 村上陽子・高橋智子「特別支援学校（知的）における伝統文化を題材にした教科横断的な授業実践：和菓子（練り切り）に着目して」教科開発学論集、9、PP. 57-71、2021
- ⁷ 高橋智子・村上陽子「特別支援学校（知的）における伝統文化を題材にした美術科および家庭科での横断的な授業実践－生徒の見方・感じ方に着目して－」日本教科教育学会全国大会論文集、第47回、pp. 95-96、2021
- ⁸ 本調査は、著者らが地域の生涯学習センターで実施した造形とダンスを組み合わせたワークショップ（2019年1月に実施：全1回）をもとに実施した。このワークショップでは、同テーマのもと、鑑賞、造形、ダンスの各活動を連動させて実施した。そのため、本調査では、鑑賞活動を含んでいる。
- ⁹ 高橋智子・山崎朱音「知的障害のある児童生徒を対象とした造形及びダンスの題材研究Ⅰ：造形とダンスワークショップを手がかりとして」静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇、50、pp. 137-152、2018
- ¹⁰ 前報は a、b、c、e（一部分）、f、g、h を分類して表を作成した。本稿では d、e（一部分）、i、j を分類して表を作成した。
- ¹¹ 高橋智子・村上陽子「学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試み no. 5－図画工作科・家庭科における連携授業の構想提案－」静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇、45、pp. 191-200、2014
- ¹² それぞれの項目は次のように説明される。「授業実践」【目的】：授業目的について、【内容】：テーマ等、【方法】：教材教具の工夫、指導方法の工夫について、【過程】：カリキュラムや授業構想（計画）について、【評価】：授業前・中・後の評価について、「子ども理解」：子ども理解について、「教科連携」：教科連携について、「教員自身の努力」：研修・教材研究等。
- ¹³ ダンスの実施及び課題の現状として、「ダンス」は教員が振り付けを決め、子どもは決められた振りを覚えて踊ったり、リトミックのように決まった運動を反復したりすることがイメージされていた。対して「身体表現」は表したいイメージを身体で表現することであり、自由な動きが現れるとイメージされていた。なお、ダンスと身体表現は本来同義である（山崎・高橋、2020、p. 282）。